

二年保育のよさを見つめる

なかで



——生活の基本をふりかえる——

柴田 い つ

私は、本園に着任するまで一年保育の五歳児との接触ばかりであった。昨年四月初めて二年保育を実施の幼稚園に転任し、あらためて幼児を見直す機会に恵まれた。といっても基本的には変わらないのであるが、四歳児の幼児に接することにより、「幼児」の純真さ・素直さ・そして徐々にはあるが、顕著な変容に接し幼児の発達というものを如実に見る思いがした。

入園後、泣き叫んでいた「H」の徐々にひとり立ちしていくようすや、人形を、ボールをじーっと抱きかかえてい

た段階から、自分の体から離せるようになり、やっと、あそべるようになっていく変化を目の前に見て、うす皮をはぐように、お母さんのぬくもりから離れ、外気のきびしさに打向っていくこうとする力、つまり、幼児自身の力で、「自立していく姿」を見たように思った。

今更ここに、こと新しく記すまでもない自明の事かもしれないが、異年齢集団のよさを身にしみて感じている。

このような意味から、私はここに、四歳児、五歳児それぞれが育っていく成長の姿を追いながらその跡を確かめて

いきたい。

(1) 四歳児としての身につけていくもの

四歳児はまず、“自分の身のまわりのことがひとりで行える”と、多くの友達と一緒に“動ける”

——(あそぶ以前のこと)——ということが、入園当初の幼児たちにとっての課題である。そして、それは、園生活の基本となつていけると言える。でも、なんといっても個人差の甚だしい時期なので、ひとりひとりの幼児への配慮は、かかせない教師の務めである。この教師の営みは、五歳児への対処とは格段の開きがある。“ひとりひとりへのかかわり”がこれほど、綿密に、そして確実になされなければ、入園当初の指導は成立たないのである。いうまでもなく、多くの仲間と一緒に話を聞くということは、はなから無理な幼児である。そこで、ひとりひとりの幼児の動きを的確に見詰めたがら、教師の働きかけをどのように幼児が受けとめ、どこまで自分の身体で感じているのか、幼児の目の動き、表情、その他の反応から掴まなければならない。

服をたたむ、靴を揃えるパステルの入れ方、マジックのふたの始末、ごみを拾う、手洗い、蛇口のしめ方などについても、ひとりひとりの幼児の理解のしかたがちがう。

だから幼児たちのやり方を見とどけ、その子に合ったことばかけ、つまり、その子の成熟度に見合った中味の言葉かけをしなければならぬ。そして、ひとりではできない幼児には、教師がその実際を示しながら、やってみなければ、本當の指導ができない。しかしながら、丸ごと面倒をみるのはいけぬ。やれると思われる、または、やってみようという気持を起させる余地を残しておく配慮もまた、大切である。いずれにしても、励まし、ほめながら気永にじっくり見守り、中途半端に終ることなくきちんと見とどけることが大切であると、つくづく感じたのである。

このように、幼児に対して行けば、基礎的なしつけときまりの指導は、生活習慣指導の場というように構えなくても、一日の生活のいくつかの経験の場において教師と幼児とのかかわりのなかで自然に身につけていくと思われる。そして、何よりも、教師自身のゆったりとした気持の落ち着きと、寛容さ、そしてそれらのことから、教師の体全体に溢れ出てくる暖かさとなり、きりっとした指導も可能となつてくる。行き届いた指導は、その重要性の認識からだけでは生れない。教師のひとつひとつの言葉やその時の態度は、このような教師の振舞によつてすなおを四歳児にしみ

込んでいくように思われるのである。

身のまわりのことの処理や対処に自信がついてきたころ、あそびの面でも、ひとり遊びから、二人、三人と友達を意識し、かかわり合いを持って遊べるようになってくる。粘土、ブロック、ままごと、砂あそび……と自分の表現したいことをたのしくおしゃべりをしながら何かの形を借りて表現したり、そのものになり切ったのしむことをしたりするようになる。この時の幼児の姿はほほえましい。

また、それと併行して、真剣に友達の事を考えてあげたり、喜んであげられる素直さややさしさの感情の芽生えも育っていく。水槽の中で暑さにのびてしまった蛙をみて、「かぜひいてるの?」と心配そうにのぞき込んだり、モンチャの人形の額に、小さくたんだハンカチをのせ、熱があるから静かにしてねと頼んだり、引越していく友達に、「かわいそう」と不安気に見送ったり、けがをして、繃帯をしてきた友達に、「がんばれよ」と励ましたりする。率直に自分の気持を相手の中に投影して考えられる、つまり、共感できるようになってくる。

さらに、物を整頓するという基本も、四歳で身につけさ

せていきたい。「させる」という表現は、押しつけていく

ようなニュアンスがあるけれども、私自身これまでは、枠にはめてしまうといった印象で、反撥もしてきたが、目の前の四歳児の姿をみてやはりこの時期に身につけさせてやりたい大切な内容だと思った。つみきの厚さ、薄さ、大小の形等知っていくうちに、平面に横に並べて続けていくことや、二段、三段と高く積み重ねて遊べるようになる頃から、ボックスの中へも、同じ形のつみきを選んできちんと収めることができるようになってくる。もちろん、教師も一緒に片付けながら、幼児に語りかけ、或はひとりごとを言いながらの教師の誘導は重要な働きかけだと思われる。

そして、きれいにかたづいた時、又或いは、大、小、厚さのちがう絵本の区別、ままごとの戸棚の整頓ができたとき、「あ、さっぱりした」という気持の爽快さを幼児とともに、教師も味わっていくことが大切であると思う。

かくして、園のリズムが四歳児に理解されていく頃、みんなで一緒にする活動の時、友達を「待ってあげる」ということも出来るようになってくる。手洗い、おべんとう、かたづけ、おはなしを聞く、帰りのあいさつ……等の中で、「順番」とか「待つ」「自分勝手なことをしない」とい

う基本的な“きまり”を毎日毎日のくり返しの中で幼児たちは、体で覚えていく。このことは、ものごとのけじめを理解していく基礎になっていくように思われる。

(2) 年長児としての自覚

このようにして、四歳児の段階をへた五歳児は、園生活の基本としての必要ないくつかの習慣が身についている。

だから、四月当初より、すべてに自信をもって行動できるし、年長になったという自覚がさらに、彼等の行動を立派にし、園の主軸になって経験を重ね、望ましい活動をしていくと言える。新しく迎え入れた年少児への思いやりや、一緒に遊んであげるなかで、遊具の扱い方、遊び方、約束事など、年長より年少への子どもらしい伝え方、示し方で教えて行く。年少児もそれを素直に受入れ、理解度も早く、遊びの中で定着していく。このようすは、同年齢ばかりの幼児ではみられないことである。

現在当園の幼児たちは、年長児を二分し、一年保育児（フェンスひとつ距てた保育園よりの入園児）との混合のクラスであるが、二年目の幼児のリードで友達関係もしっかり樹立される。このことは、やはり、四歳児時代の経験が可能とするのであろう。つまり、二年目の幼児は、戸惑

うことなく、安定感を持って園の総ての物事に対処できるからであろう。つまり、彼等は“自信”を持っているのである。そして、彼等は、意欲や根気の点からみても、途中で放り出すことなく、挑戦意欲が旺んで、幼児らしい発想やアイデアもみられる。

なお、当園は、同一地区に保・幼・小・中とあり、同和地区をかかえ、同和教育の精神にのっとって保育され、幼児のよき、特徴を生かしながら成長していく。そして、幼稚園でのメンバーそのまま中学校まで生活をともにするわけで、文字どおり、一貫教育の実践地区といえる。保・幼・小・中の四者合同研修会も持たれているが、ここでも、やはり、基本的な生活習慣涵養の大切さが話し合われている。そして、家庭ならびに子どもをとりまくまわりの社会をもひっくるめての理解と実践の大切さはいうまでもない。なにはともあれ、次の時代を背負う幼児たちのために、今後何が大切か、何を育てていけばよいかをみきわめ、実践していかなければならない。

(四日市市立保々幼稚園)